キーワードは遊び心と身軽さ。

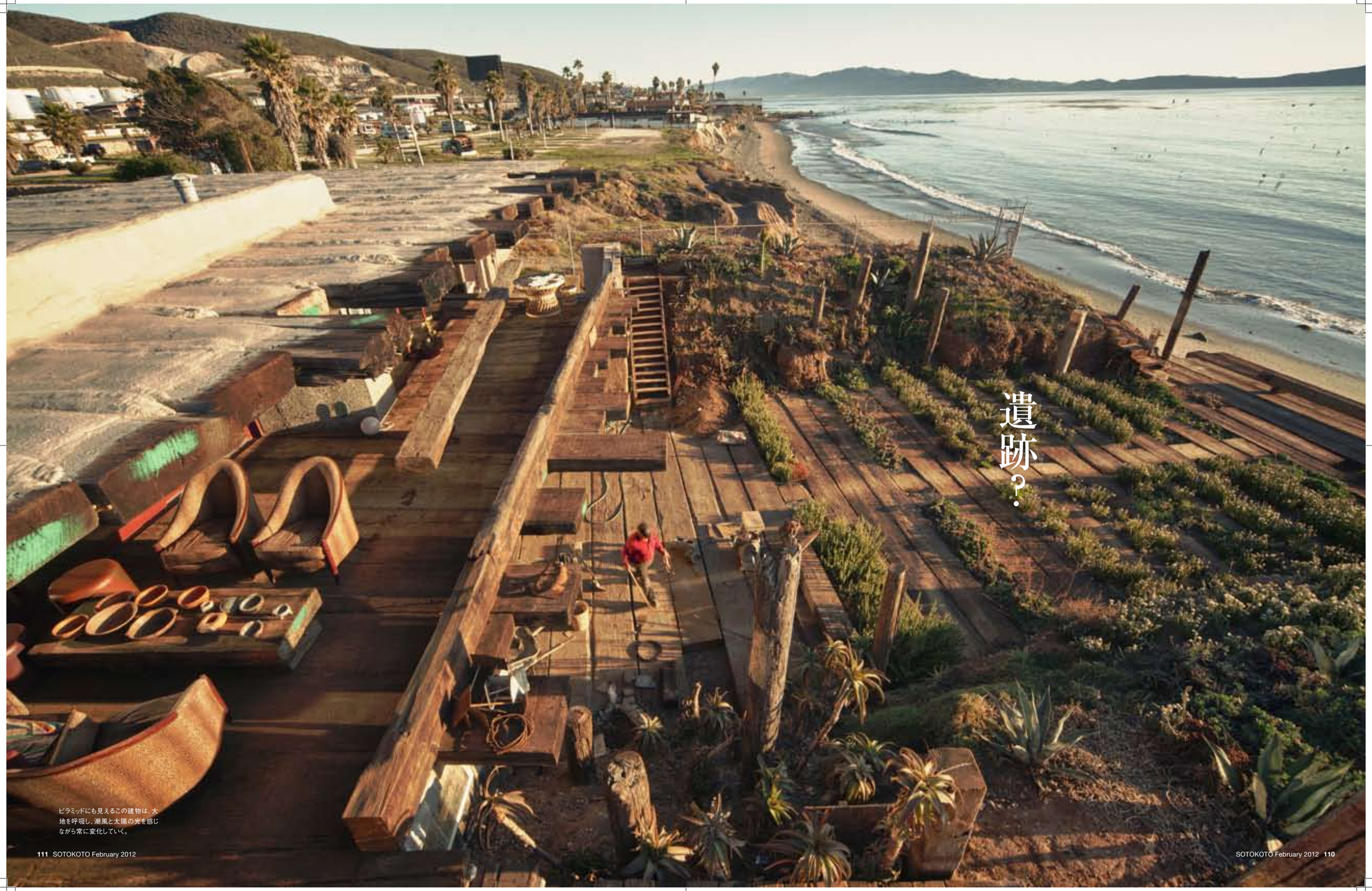
# メキシコ流リサイクルでかっこいい生き方。

本格的なリサイクルや自給自足を現代社会の生活に
採り込むのは難しいと考えられがちだ。
でも、それをゆるやかに人生と融合し、
日々を楽しむひとたちが、メキシコにいる。
そんな生き方の秘訣とは、いったい何だろう。

photographs by Yoshihiro Koitani text by Miho Nagaya

## 廃墟？

大自然のなかにポツンとある電気のない隠れ家。満天の星と月を眺めながらの露天風呂だって楽しめる。



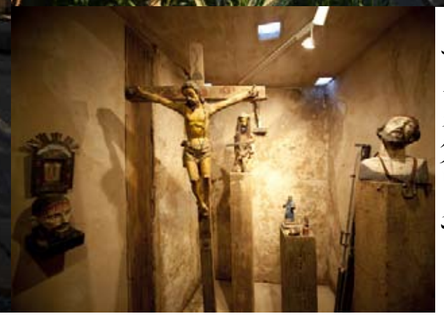
# 遺跡？

ピラミッドにも見えるこの建物は、大地を呼吸し、潮風と太陽の光を感じながら常に変化していく。

上／海を一望するベランダと、民芸とアンティークが融合したインテリアの居間。下／地下の寝室には、アレハンドロの父親が作った素敵なガラステーブルが。その創造性は彼に受け継がれている。

上／サンフランシスコの1910年代の橋桁に使われていた木材を、天井や床に使用。下／キッチンの大テーブルも、橋桁を使ったオリジナル。「みんなの距離が近くなるようにキッチンで食事する」。

# いいえ、メキシコ流リサイクルハウスです。



# ようこそ、潮騒の聞こえるリサイクルハウスへ。

右／レイバンの看板とグアダルーペの絵が家の入り口に、アレハンドロがお出迎え。上／玄関前にはメキシコ各地のトルティージャをこねる石器、メタテが並ぶ。下／地下にはメキシコカトリックの宗教モチーフの展示スペースが。

家の裏手から見ると、建物が崖を削ってでき、土壁を使っている様子が、よくわかる。

## 先住民の暮らしから教わるべきこと。

アメリカのカリフォルニア州から約120キロの国境近くの港町、バハ・カリフォルニア州エンセナーダを拠点に、「ゴミ」や土を使ってユニークな建築を造るカップルがいる。メキシコシティ出身で、エンセナーダに暮らして6年目を迎えるアレハンドロ・ダコスタと、クラウディア・トゥレントの建築家夫妻だ。

取材のためにエンセナーダに着いたとき、妻のクラウディアはメキシコシティに出張して不在だったのだが、アレハンドロが、彼らの手がけた建築のいくつかに案内してくれた。

まず、案内されたのは、海沿いの国道脇にある夫妻の家。古ぼけた木の扉に、メキシコカトリック教の褐色のマリア、グアダルーペの絵が描かれ、なぜかレイバンの広告看板が張られている。「誰かが張っていったのを面白いから、そのまま残した。今じゃ〝レイバン9・99ドル〟が、うちの公式住所だ」。

広い敷地のなかには、彼らのオフィスや家具工房、一緒に働く職人家族たちが住む貨物コンテナを利用した建物が並び、さらに奥に進むと、夫妻とその娘が暮らす家が現れた。

思わず、その美しい風景に息をのむ。波の音と潮の香りにつつまれた、海が一望できるガラス張りの居間と食堂、そしてベランダ。この家の天井、床、家具などに利用されている全長70メートルの木材は、サンフランシスコの古い橋に使われていたものだ。海に向かってのびる、桟橋のような庭には、先スペイン期から、この土地に生えているリュウゼツラン科のマゲイや、廃屋に生えていたアロエなどが移植され、潮風と日光をたくさん浴びて野生化している。

建てて2年ほどというのが信じられないほど、この家は風景と一体となっている。まるで、ずっと昔からここにあったかのように。

気づけば、職人たちが土を掘り返す作業をしている。この家は、まだ完成していないようで、新たに部屋を加えたり、部屋の用途を替えながら変化していくらしい。

まるで、子どものときに想い描いた秘密基地のようだ。

驚いたことに、この家に柱らしきものはなく、崖部分の土を削って形成している。地面と触れる部分には、構造上コンクリートを使っているが、仕切りとなる壁部分は、削りだした土に、石灰と10％のコンクリート、木屑を混ぜて固めたもの。壁を叩いてみたが、強固で崩れそうにない。

寝室やバスルームは、崖の地下部分に配置している。地下にあるので、海からの強風を防ぎ、土壁が湿度と温度を一定に保つので、エアコンがいらない。「コンクリートだけの家だったら、そうはいかない。壁材の配合を研究した結果、土が多いほど、自然に温度調節ができるのがわかった。僕たちは、様々な先住民コミュニティで建物の修復作業をしてきて、古代遺跡の建築法や、遊牧民たちが造る自然素材の家に再注目した。エンセナーダを含むメキシコ北部の人々は、古くから天候により移住する習慣があり、あえて土や草の簡素な家を造ってきた。現代では仕事を求めてアメリカへ移住するように、その目的は変化しているけれど、貨物コンテナを使った移動可能な家を建てる。だから、この地に適した土やコンテナで建築する」

インテリアには、彼らがメキシコ各地で建設作業中に発見したものもあるという、先スペイン期の発掘品の数々や、先住民文化とカトリックの融合である宗教モチーフのコレクション、華やかな手刺繍の民芸テキスタイルが飾られ、古代へのリスペクトが感じられる。

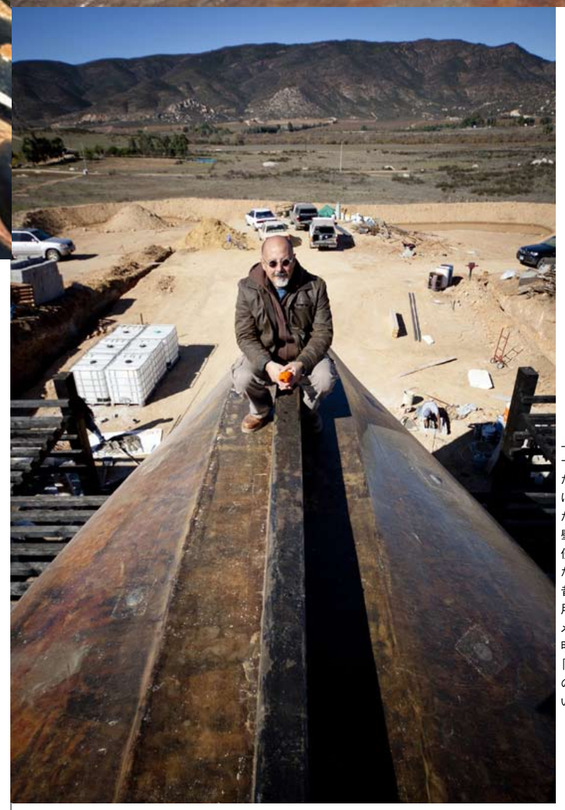
上／アレハンドロの建築プランノートには奇妙なコラージュや落書きもいっぱい。その遊び心こそが豊かなアイデアに繋がる。中／クラウディアの家具工房では、職人たちがリサイクル木材家具を作製中。下／家の地下に新たな部屋を建てるため、土壁を固めている。

かと思えば、素敵なミッドセンチュリー風ガラステーブルが寝室の窓際に置いてあったり。

「これは、父が作った家具だ。彼は弁護士だったが、自分でものを作り、ものを修理しながら永く使うような、創造性豊かなひとだった。僕は8人兄弟の7番目で、身の回りのものにお下がりを使っていたから、未だに新しいものを買う習慣がない」

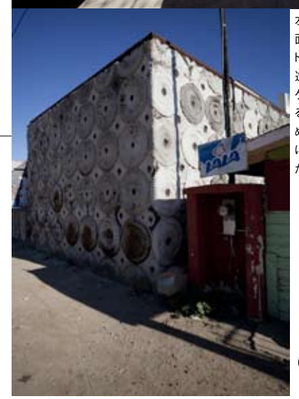
最新のテクノロジーや建築にも興味がないそうだが、この家は、ずいぶん革新的ではないか。

「先住民の暮らしからアイデアを得たことを活かしているだけだよ。先住民は遅れているという風潮があるが、大きな間違いだ。彼らから学ぶことはた



## 世界の海を渡った船の面影を、そのまま建物に。

上／建設中のワイナリー、オンブリゴ。土を削りだして造った建物の上に廃船の屋根をつけた。右上／玄関部の外壁の装飾には、屋根で使った船の板を剥がしたものを張りあわせた。昔の塗装を活かして使用。右下／建物内部。メガネの廃棄レンズが明かり取りの窓に。左／「この船のように、地域の将来もひっくり返したい」とアレハンドロさん。



## リサイクルのアイデア満載なワインの寺子屋。

左上／エスクエリータの正面。地元画家カルロス・デ・ラ・トーレによる壁画「ワインの醸造」が目印。左中／地元のマゲイを使ったメスカル工房もある。左下／オリーブ油を濾すためのフィルターが壁の装飾に。右／美味しいワインを飲んだ後の空き瓶も活用。

くさんある」

### エコロジーを考えて建築したことはない。

いま住む家の建設に着工するまで、夫婦は1年ほどコンテナの家に住みながら、この地の日光の入り方、風向きを観察し続け、その結果を元に、土の削り方まで計算したという。建築に使う色も、土地の植物、岩、空の色をすべて、色見本化してから使う色を選ぶというように、まわりの風景に溶け込むものを心がけている。

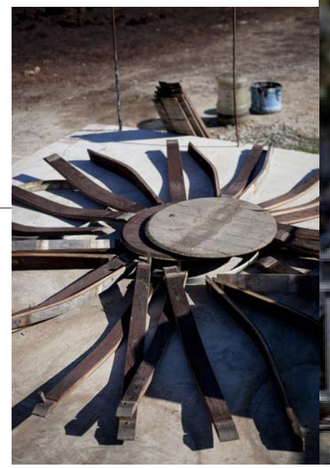
「エコロジーを考えて建築したことは一度もない。その場所の状況をよく見て、動物や植物の生態系も考え、環境にいかに適したものを作るかによって、おのずとエコロジーな建築になる」

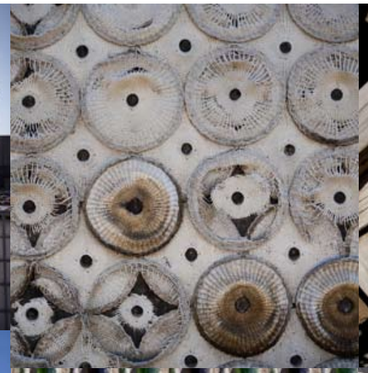
では、リサイクル素材を使うのと、先住民の知恵とはどう結びつくのか。

「先住民たちは、身の回りのものだけを使って創造していく。それを都市で実践する場合、先住民の村で使っているような自然素材はない。だからこそ、わざわざ遠くの山から木を切って都会に運んでくるのではなく、自分たちの生活で出たゴミを建材として使うのが適切だ」

そんな哲学は、彼らのすべての建築物にも活かされている。バハ・カリフォルニア半島にあるエンセナーダは、豊かな地中海性気候により、ワイン用ブドウの特産地として多くのワイナリーがあるが、夫婦が建築を手がけるものが10軒ほどある。そのうちのひとつ、

上3点／エスクエリータの敷地内には、家、オフィス、ワイナリーで出た「ゴミ」を分別して、保管する場所がある。ワイン醸造過程で出たブドウの搾りかすもコンポストにする。下右／ワイン樽の上下につく鉄枠も再利用。下左／ワイン樽は通常5年で廃棄されるが、ここでは分解してマテリアルに再生。





彼らが建材に使う素材は、「ゴミ」以前のときの姿をとどめたまま活用される。それが時によって、削れたり、錆びたり、風化していくのを味として楽しむのは、丈夫で完璧な姿を求める現代建築とは正反対の発想だ。右上／掘り起こした土と石灰、藁を混ぜたもの。右中／ベッドのマットレスのスプリングを取り出して使用。右下／ワインの樽材。中上／工事現場の基礎に使われていた木材。中下／土壁に古タイヤの模様をスタンプのように押したもの。左上／オリーブ油を漉す作業に使ったフィルター。左下／ワインの瓶。

## マテリアルの精神と物語を大切にしたい。

現在建設中の『オンブリゴ』は、土を削って、固めた壁に、廃船のボディ部分をひっくり返して、屋根のように載せている。建設の過程で基礎を造るために使った木材や、掘り返した土や石なども、最終的に建材として使いきり、建物を完成させる。だから、ゴミはいっさい出ない。

また、夫婦も経営に関わる、『パラレロ』には省エネルギーへの工夫がある。通常のワイナリーでは、ブドウを発酵させる大きなタンクへ入れる際に、電動ポンペでブドウを引き上げて投入するのだが、その手間を省くために、わざわざ建物自体を地下に造った。屋根部分に開けた穴からパイプを通して、下にあるタンクにブドウを投入するシステムを導入している。

ふたつのワイナリーとも、地下部分にあることから、エアコンなしでも、ワインの製造過程で重要である温度を一定に保てるのだ。

### マテリアルは日常生活のなかにある。

彼が運営に関わり、建築を手がけた、ワイン学校と、オリーブ油製造所の『エスクエリータ』の敷地内には、家やオフィス、ワイナリーで出たゴミや道で拾ったものなどをマテリアル別に分けて保存する場所やコンポストがある。

「毎日なにか建材として使えそうなものを集めて、いたるところに蓄えている。いつか出番が来るのを待っているんだ」

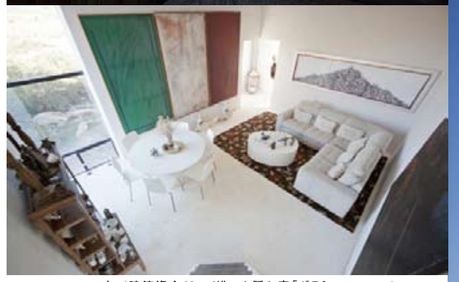
このエスクエリータの建物自体が、また面白い。ワインの樽や空き瓶、マットレスのスプリング、オリーブ油を漉すためのフィルターなどを、外壁の建材として再利用し、その素材感を見ているだけでも楽しい。

「ワイン瓶のガラスを粉々にして再利用するのではなく、瓶のフォルムを残して使うように、リサイクルは、マテリアルに宿る精神を活かしたものでなければならない。マテリアルの持つ背景の物語を大切にしたいんだ」

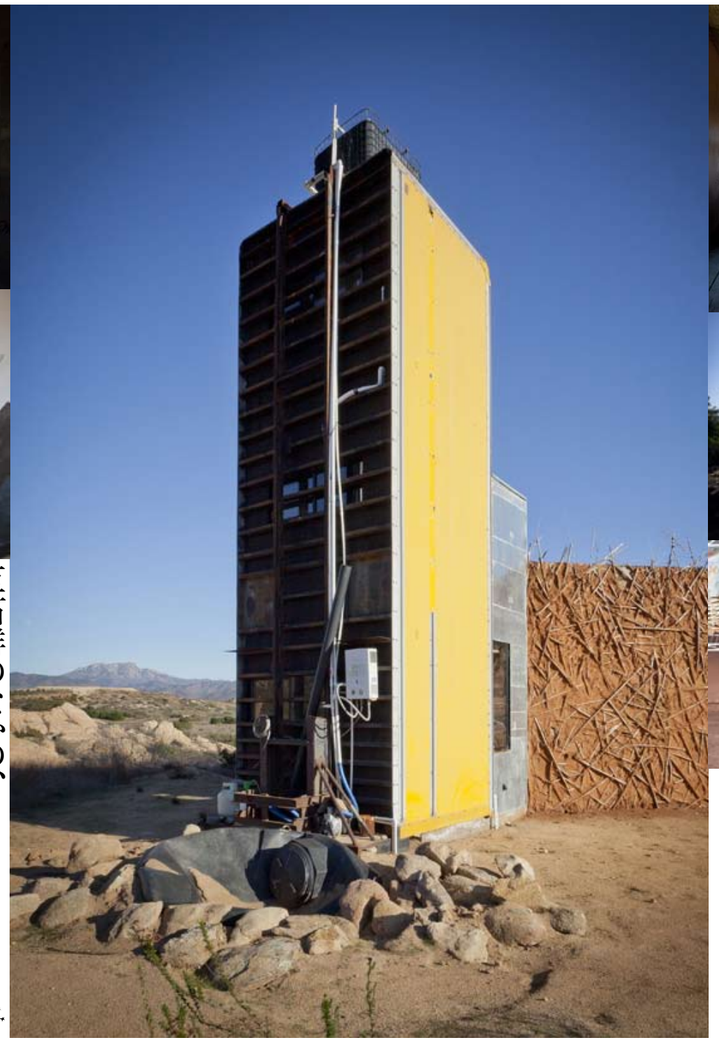
### コミュニティの循環、ひとの繋がりも考えた建築。

アレハンドロとクラウディアがエンセナーダの地域に関わるようになったのは、実は22年前にさかのぼる。市街地から20キロほどのグアダルーペ渓谷では1888年よりワイン産業が始まったが、1980年代、ほとんどのワイナリーは、廃れ、消滅の危機にあった。そこに、アレハンドロの兄のウーゴが、この地域のワイン産業を盛り上げようと、夫妻に声をかけ、老舗ワイナリーを復興させた。彼らのプロジェクトは、ワインに文化的な付加価値を与え、レストランや、ギャラリーなど人々の交流の場所を作るものだった。

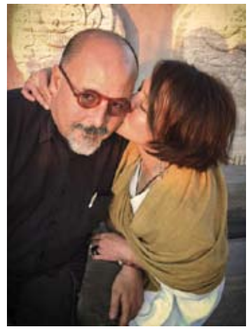
そこからアイデアが広がり、ワイン学校『エスクエリータ』のプロジェクトが1992年に始まった。誰でも生徒になれば、そのスペースを使って、選んだブドウを収穫、醸造し、自分のワインを造り、それをネットショップ



右／建築資金ゼロで造った隠れ家「グラミータ」は、以前からその場にあったコンテナを垂直に立てて利用。左上／建物の上部はベッドルーム。窓からは巨石しか見えない。左下／外から想像できないほど、モダンでシックな内部。さりげなく、地元アーティストの作品を飾っている。



# 巨石群のなかの、ちょっと不便が楽しい家。



Alejandro D'Acosta & Claudia Turrent

アレハンドロ・ダコスタ&クラウディア・トゥレント●
メキシコシティ出身、バハ・カリフォルニア州エンセナーダ在住の建築家カップル。メキシコ南部オアハカ州やチアパス州の先住民コミュニティでの社会活動で、多くの建築を手がけた経験を元に、先住民文化の影響を受けたエコロジー建築を実践し続ける。ホームページ：http://www.alejandro-dacosta.com/

外に置かれたバスタブに湯をはって、月を眺めながら風呂に入ることもあるとか。なんて贅沢な空間なのだろう。

「月がきれいなときは友人たちを連れてきて、ここで夜を過ごすことも。僕たちの家は海の波音を楽しむために造ったけど、ここはまったく音が聞こえてこない。静寂を楽しむ場所なんだ」

資金がなくても、アイデア次第で素敵な居場所が造れる。人生を面白くするヒントは、実は手の届くところにあるのだ。日常のなかで見過ごしているもののなかに、あるのかもしれない。

エンセナーダでの取材後に、メキシコシティでクラウディアに会ったのだが、彼女の言葉が印象的だった。

「建物がすべて便利で快適にコントロールできる必要性はない。冬は寒く、夏は暑いのを肌で感じるものでしょう？　私たち人間はそうして自然と関わってきたのに、そんなことすら忘れている。自分の命よりも長い、１００年以上の耐久性がある建物を作って、動かすこともできず、確実に大地にダメージを与えていく。ならば、すぐに動かせるコンテナの家や、自然に還る土の家に住んだほうが気分もいい」

ふと、自分の子孫へ継ぐべき遺産とは何だろうと考えた。豪華な家のような物質的財産よりも、大地の素晴らしさを未来へ伝えることのほうが、ずっと大切なことではないか。

アレハンドロとクラウディアの遊び心あふれる建築は、私たちに重要なメッセージを語りかけているのだ。

上中から逆時計まわりに。／オーガニックレストラン『コラソン・デ・ラ・ティエラ』のオーナーのアメリカ人、エイリーン（左）と、スタッフのフランス人アニエス。この地に魅せられて移住する外国人も増えた。／レストランの建材にはロサンジェルスの古い橋を使用。／レストラン前の畑。／その畑で採れるハーブでシャンプーも作っている。／ワイナリー『パラデロ』。ブドウを醸造タンクに投入するための、屋根に開いた穴。／地下の貯蔵庫は適した温度を保つ。／ワインの瓶詰作業。／ワイナリー屋外には約600人収容できる芝生のコンサート会場が。

や店舗で売ることができる。これによって、エンセナーダには、新しい小さなワイナリーがいくつも生まれ、その競争によって、ワインの品質も向上した。いまやメキシコの最高級ワインの産地となったのだ。

彼らが建てた、ワイナリーやレストランのすべてに、展覧会やコンサートができる文化スペースがあり、毎年８月に行われる、地域をあげてのブドウの収穫祭、ベンディミアに活用される。同祭は、国内外から観光客が集まる一大イベントに成長している。

また、エンセナーダは近年アメリカへ移民する人口が多かったのが、ワイン業界の盛り上がりにより、人々が地元にとどまるようになったのだ。

地産地消の考え方が根付いてきたのも、ここ5年ほどだそうだ。たとえばアレハンドロが建築を手がけたオーガニックレストラン『コラソン・デ・ラ・ティエラ』は、シェフ自らがレストランの目の前にある畑を耕し、育てた野菜を使う。その日に採れる野菜によって、料理するメニューを決めるのだ。レストランは、エコロジーをテーマにしたホテルの一部なのだが、ホテルで使うシャンプーやクリームの材料になるラベンダーも同じ畑で育てている。自分たちで使うものは自分たちで作る、そんな店が増えているのも、アレハンドロとクラウディアの影響が大きいようだ。

「ショッピングモールやジム、プライベートビーチも敷地内にあり、外出する必要のない高級マンションがこの辺りでも増えているが、人と人が出会い、地域と繋がっていく生活のほうが、どれだけ豊かかしれない。資本主義的な建築は、人間が楽するための合理性を目指すが、それは結局人にとっても、大地にとっても合理性のないものだ。先住民から学んだのは、その土地の状況を把握すること。建築家は、風土、食文化、そして人の流れも知っているべきだ」

## 遊び心に込められた未来への伝言。

アレハンドロとクラウディアの建築を巡ったなかで、最も興味深かったのが、廃墟の工場の敷地を抜けて、巨石が山のように積み重なった場所の奥地に、忽然と現れる小さな隠れ家、「グラミータ」だ。この土地をとても安く手に入れたそうだが、なんと、元はクラックコカインの密造所だったそう。前からあった、小さなコンクリートの建物とコンテナを基盤にし、建材には廃棄物や、その場の土や竹を使っているので、まったく費用がかかっていない。月に2、3度は必ずここを訪れて、いろんな建築やデザインの構想を練るそうだ。

「できれば、毎日ここで過ごしたい。いまは年頃の娘が心配だから、家を空けるわけにはいかないけど」と、アレハンドロは微笑む。

電気は通っていなくて、夜はろうそくを灯す。ガス給湯器はあるので、屋